



残業後の密室で

～隙のないわたしが、墮ちるまで～

残業後の密室で【体験版】

蜜夜文庫

く隙のないわたしが、堕ちるまでく

蜜夜文庫【体験版】

：

第二話 定時を過ぎたオフィスで

オフィスの蛍光灯は、夜になると少しだけ青白く見える。

二十時を回ったフロアには、わたしと、桐生課長のふたりしか残っていないなかった。他の社員はとつくに帰っている。フロア半分の照明はもう落とされていて、わたしのデスクまわりだけが、ぽつんと明るい。キーボードを打つ音と、空調のかすかな唸りだけが、広い部屋に響いていた。窓の外は、ビルの灯りが点々と滲む、東京の夜景。

神崎玲奈、二十八歳。営業企画部。

仕事はできるほうだと思ふ。資料は誰よりも早く正確に上げるし、会議でも物怖じしない。「神崎さんに任せておけば安心」と上司に言われるのが、わたしの密かな誇りだった。

入社して六年。女だから、若いから、と侮られないように、わたしはずっと走り続けてきた。同期の男たちが飲み会で人脈を作っているあいだ、わたしは資料を読み込んだ。誰よりも準備して、誰よりも完璧に。一度でも「これだから女は」と言われたら、その瞬間に終わる。だから、ミスはできない。隙を見せない。それが、この男社会で生き抜くためのわたしのやり方だった。

——その隙のなさが、ときどき自分を息苦しくさせることにも、気づいていたけれど。

家に帰っても、待っている人はいない。冷蔵庫の中身は、いつも同じ。コンビニのサラダと、炭酸水。恋人なんて、もう何年もない。「神崎さんって、隙がなさすぎて声かけづらい」と、同期に笑われたことがある。笑い話のつもりだったんだろう。でも、その夜、わたしは少しだけ、泣いた。誰にも見られない、自分の部屋で。

隙がない女は、強い。でも、強い女は、たぶん、少しだけ、さびしい。

完璧でいなければ、価値がない。いつからか、そう思い込んでいた。仕事ができる「神崎さん」でいるあいだけ、わたしは、ここにいていい。そんな気がしていた。

「神崎さん、まだやってるの」

低い声に、手が止まった。

振り返ると、桐生課長が自分のデスクから立ち上がって、こちらを見ていた。三十代後半。営業企画部のエース課長で、いつも冷静で、何を考えているのか読めない人。スーツをきっちり着こなして、感情をあまり表に出さない。部下からは「氷の桐生」なんて陰で呼ばれている。

でも、わたしは知っていた。この人は、冷たいんじゃない。ただ、無駄なことを言わないだけだ。会議で誰かが理不尽に詰められているとき、さりげなく話を逸らしてフォローを入れるのは、いつもこの人だった。先月、わたしの企画が役員に却下されたときも、「数字の裏付けはあります。私が保証します」と、静かに言ってくれた。

あのとき、初めて、この人の背中を、頼もしいと思った。

「はい。明日のプレゼン資料、もう少しで」

「完璧主義だな、相変わらず」

課長は、給湯室のほうから戻ってきたところらしく、コーヒーの入った紙コップを二つ持っていた。一つを、わたしのデスクに、ことりと置く。

「無理しすぎるなよ。君が倒れたら、部署が回らない」

「……ありがとうございます」

意外だった。この人が、こんな気遣いをするなんて。わたしはコーヒーを一口飲んだ。ブラック。砂糖もミルクもない。わたしの好みを、知っているのだろうか。それとも、偶然。

訊くのも変な気がして、わたしは黙って、もう一口飲んだ。あたたかさが、張りつめた肩を、少しだけ緩めた。残業の夜に、誰かが淹れてくれたコーヒー。こんな些細なことが、どうしてこんなに、胸にくるんだろう。

桐生課長は、わたしの隣の空いた椅子を引いて、腰を下ろした。距離が、近い。普段のオフィスでは絶対にはない距離感に、わたしは少しだけ身を硬くした。昼間のフロアなら、課長が部下の隣にこんなふうには座ることはない。夜の、誰もいないオフィスだから、許される距離。

「資料、見せてもらっていい？」

「あ、はい」

モニターを彼のほうに向ける。彼は身を乗り出して、画面を覗き込んだ。彼の肩が、わたしの肩に、軽く触れた。スーツ越しの、男の人の体温。それだけで、なぜか心臓がひとつ、跳ねた。

落ち着け、と自分に言い聞かせる。ただの上司だ。仕事の話をしているだけ。

「この数字、根拠は？」

「先月の実績ベースで、係数を……」

説明しながら、わたしは妙に意識していた。彼の視線が、画面ではなく、ときどきわたしの横顔に向けられていることを。気のせいかもしれない。でも、気のせいだと思おうとするほど、頬が熱くなっていく。

彼の、コーヒーの香りと、かすかな煙草の匂い。整髪料の、清潔な香り。男の人の気配が、こんなに近くにあるのは、いつぶりだろう。指先が、キーボードの上で、わずかに震えた。それを気づかれないように、わたしは画面の説明を続けた。

「……完璧だ。さすがだな」

彼が、ふつと笑った。氷の桐生が、こんなふうには笑うんだ。初めて見た。仕事中の、計算された微笑みじゃない。素の、やわらかい笑顔。その笑顔を、わたしだけが見ている。そう思うと、なぜか、胸の奥が、くすぐったくなった。

そして、彼の手が、わたしのマウスに伸びた。スクロールしようとしたのだろう。でも、その手が、マウスに置かれていたわたしの手の上に、重なった。

——触れた。

ほんの一瞬。冷たいオフィスの空気の中で、彼の手だけが、熱かった。

わたしは、とつさに手を引かなかつた。引けなかつた、というほうが正しい。彼も、手をどけなかつた。重なつたまま、時間が止まったように、ふたりとも動かなかつた。心臓の音が、彼に聞こえてしまうんじゃないかと思うくらい、大きく鳴っていた。画面のカーソルが、行き場をなくして、ぽつんと止まっている。

「……課長」

「悪い」

彼が、ゆつくりと手を離れた。何事もなかつたように、椅子の背にもたれる。でも、その目は、もう仕事の前ではなかつた。何かを、こらえているような目だつた。

「神崎さんはさ」

彼が、天井を見上げながら言った。

「いつも、隙がないよな。誰の前でも、ちゃんとしてて、崩れない」

「……それが、仕事ですから」

「疲れないさ」

その一言が、不意打ちだつた。

疲れないさ——誰も、わたしにそんなことを訊かなかつた。「さすが」「頼りになる」「安心」。みんな、わたしの完璧さを褒める。便利に使う。でも、その完璧さの裏で、わたしがどれだけ気を張っているか、誰も気づかない。気づこうとしない。完璧であることが、当たり前だと思われている。

喉の奥が、つまつた。

「……疲れます、よ」

気づいたら、本音がこぼれていた。

「でも、崩れたら、終わりだから。女がこの会社で一度でも舐められたら、もう取り返しがつかないから。だから、ずっと、気を張ってないと……。弱音なんて、吐けないんです。吐いた瞬間に、『やっぱり女は』って、そう思われるから」

言いながら、なんでこんなことを話しているんだろう、と思った。相手は上司だ。弱みを見せるなんて、わたしのやり方に反する。明日になれば、後悔するに決まっている。でも、止まらなかつた。この静かな夜のオフィスと、彼の手の温度の記憶が、わたしの何かを緩めていた。ずっと、誰かに、聞いてほしかったのかも知れない。

桐生課長は、しばらく黙ってわたしの話を聞いていた。急かさず、否定もせず、ただ、聞いていた。アドバイスも、慰めも、口にしない。ただ、わたしの言葉を、受け止めるように。

それから、ゆつくりと身を起こして、わたしのほうを向いた。

「俺の前では、崩れてもいい」

え、と顔を上げる。

「ここには、俺と君しかいない。誰も見てない。評価も、噂も、関係ない。……たまには、神崎玲奈じゃなくて、ただの君に戻ってもいいんじゃないか」

彼の声が、低く、わたしの奥のほうに、染みこんできた。

ただの、わたし。——そんなもの、もう何年も、自分でも忘れていた。いつも「できる神崎さん」を演じて、本当の自分がどこにいるのか、わからなくなっていた。期待に応えること。隙を見せないこと。それだけ、積み重ねてきた。完璧な仮面の下に、素顔を、隠し続けてきた。

彼の手が、もう一度、わたしのほうへ伸びてきた。

今度は、頬に触れた。大きな手のひらが、わたしの頬を、そっと包む。親指が、目尻を、なぞった。そこが、いつのまにか、濡れていた。わたし、泣いてるんだ。気づかないうちに。仕事中は、絶対に流さない涙が、この人の前で、勝手にこぼれていた。

「……っ」

慌てて顔を背けようとした。こんな顔、見せられない。完璧な神崎玲奈が、上司の前で泣くなんて。明日から、どんな顔をすればいい。でも、彼の手が、優しく、それを引きとめた。

「逃げるなよ」

かすれた声だった。いつもの冷静な課長じゃない。その声に、わたしの体の芯が、ぞくりと震えた。

「俺、ずっと君のこと、見てた。仕事ができるからじゃない。……気を張って、ひとりで全部背負ってる君が、危なっかしくて、目が離せなかった。会議で完璧に喋ったあと、誰も見てないと思つて、ふつと疲れた顔をする。あれを見るたびに、何かしてやりたくなくなった。コーヒーくらいしか、できなかつたけどな」

——コーヒー。ブラックの。やつぱり、偶然じゃ、なかつたんだ。

嘘、だと思った。この人が、わたしのことを、そんなふうに見ていたなんて。

でも、わたしの頬に触れる手は、震えていた。冷静沈着な氷の桐生の手が、わたしに触れて、震えている。それが、答えだった。言葉より、その震えのほうだが、ずっと正直だった。

顔が、近づいてくる。

ゆつくりと、わたしの逃げ場を確かめるように。拒むなら、今ならまだ間に合う。頭の片隅で、警告が鳴っている。上司と部下だ。こんなの、間違ってる。明日からどんな顔をして仕事をすればいい。これまで積み上げてきたものが、一晩で崩れるかもしれない。噂を立てば、わたしのキャリアは、終わるかもしれない。

でも——。

わたしは、目を閉じた。

拒まなかった。拒みたく、なかった。ずっと張りつめていた糸が、この人の前でだけ、ほどけていくのを感じていた。崩れたら終わり。そう信じてきたのに、この人は、崩れてもいいと言ってくれた。その言葉に、わたしは、抗えなかった。たった一度くらい、弱くなっても、許されるんじゃないか。この人の前では。

——この続き、崩れる夜は、製品版で。(全3話・約12,900字)